

〈優秀賞〉片道二時間の履歴書

筒井 優子

祖母の小さな畑は、四季を刻み、食卓を彩ってきた。春の陽だまりに芽吹く小松菜、夏の太陽に輝くトマトとなすの深紫、秋風に揺れる白菜の薄緑、土の香りと共に掘り起こされる大根とさつまいもの素朴な色合い。「畑はおばあちゃんの生きがい。うちで食べる分だけあれば十分なんだから」と、いつも腰を曲げて土と語り合っていた。私が一人暮らしを始めてからも、季節ごとに届く段ボールは宝物だった。お礼の電話をするたび、「今年は枝豆が上手にできたんだよ」と祖母の声は弾んでいた。その声の向こうに、小さな畑で微笑む祖母の姿が見えるようだった。それは、私にとって永遠に続くと思われた光景。

けれど、八十を過ぎた祖母の身体は、静かに限界を告げていた。「もう畑はできないね」その言葉に宿る諦めと寂しさが、胸に重く沈んだ。施設への入居が決まり、代々受け継がれてきた小さな畑は、雑草に埋もれる運命を待つばかりだった。役所で相談すると、畑の貸出制度があることを知った。「近くに新興住宅地ができていて、そこのご家族が子どもの食育に、と需要があるんですよ。」職員の言葉に、かすかな希望の光を見た。小さな手で土をいじる子どもたち、トマトの実が赤く染まるのを見つめる親子の笑顔。そんな温かな光景を心に描いていた。

ところが現れたのは、片道二時間もかかる遠方からわざわざ応募してきた二十代の女性。会社員で独身、車で通うという。本当に続けられるのだろうか。不安がざわめいた。初めて畑を案内した日、彼女は雑草とその間から顔を出す土を、まるで宝石を見つめるような目で見つめていた。「会社も仕事も向いてなくて」その細かい声に、白く青ざめた頬に、深い疲れが刻まれていた。「ここで野菜を育てながら、自分も立て直したいんです。」

その瞬間、私の中で何かが音を立てて変わった。単に畑を維持できればいい、荒れさせなければそれで十分だと思っていた。だが、この小さな畑が、彼女の傷ついた心に寄り添い、新しい季節への扉を開く場所になってほしい。土の温もりが、彼女の青白い頬に血の色を取り戻してくれますように。そんな願いが、胸の奥から溢れ出した。

今、祖母の畑は再び命に満ちている。週末の朝、高速道路を二時間かけて通ってくる一台の車がある。土に触れ、種をまき、水をやり、収穫する。その一つひとつの作業が、きっと彼女の心に新しい根を張らせているのだろう。土地は、ただそこに在るだけの場所ではない。人々の願いを静かに受け止め、時を越えて新しい物語を紡ぎ続ける。祖母が愛し続けた小さな畑が、今度は別の誰かの人生を、やさしく支えている。四季は巡り、土地は継がれていく。